

1. 基本コンセプト

小千谷は、雪深い冬から一年を通して、四季折々の自然の移ろいやまちの出来事をビビッドに感じられる場所です。まち・人・資料の総体である「小千谷のコト」は、時間のなかでダイナミックに変化します。この変化を表現し増幅するために、Float / Anchor / Roof を組合せた動的な建築を提案します。

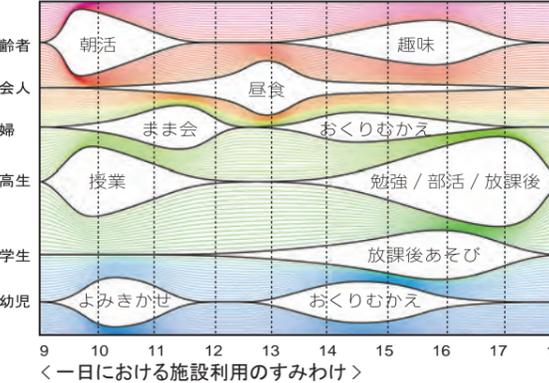
1.1 小千谷の多様なバイオリズムを織り上げる (実空間 × 情報空間)

1. Float 一動く書架や展示棚によって資料の流動性を高める
資料相互の結びつきや、あいだに生まれる小さな空間を時に応じて変化させ、共通の関心事が浮かび上がるきっかけをつくります。

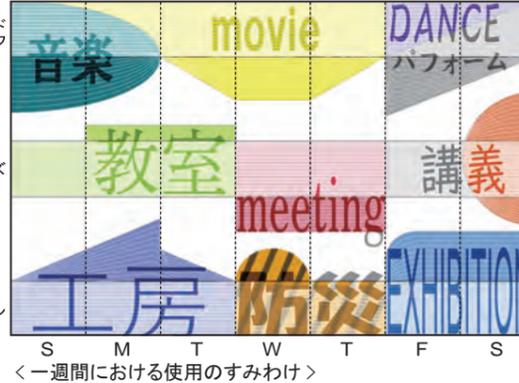
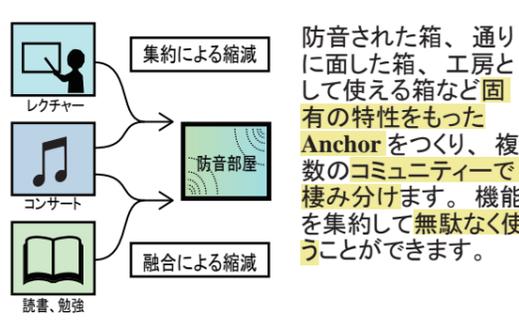
2. Anchor 一時間の中で棲み分けられるコミュニティのための箱
Anchor と呼ぶ、それぞれの特性をもった箱が、場の特性を共有する複数の活動によって棲み分けられます。Anchor は将来的に、Roof の下だけでなくまちへも広がります。

3. Roof 一季節ごとの棲み分けを顕在化させる骨太なプラットフォーム
小千谷の重い雪を支えるフラットな屋根は、雪のない季節には群衆や設営車が載せられる多様なイベントのプラットフォームになります。

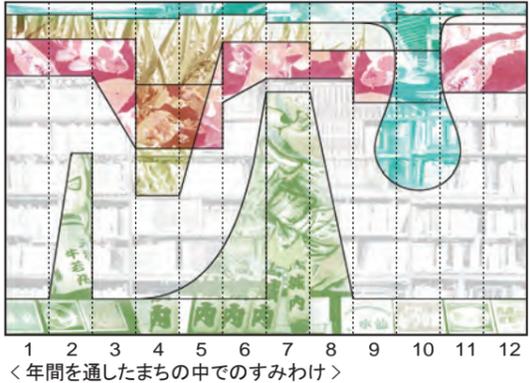
1.2 多様な人々が集まり新しい出会いが生まれる場



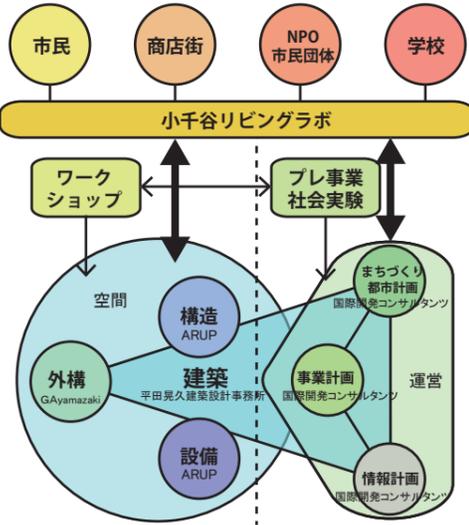
1.3 多様な活動を共存させる空間



1.4 多義的な見方のできる施設



2. チーム体制 / チームの特徴



関連する分野のエキスパートからなるチーム
図書館等複合施設の融合的な機能、情報空間との連携、まちづくりへの展開、そして小千谷が有する地理的特性を踏まえ、空間、構造、設備からなる建築チーム、情報空間や社会教育事業、そしてまちづくりに関するエキスパートからなる体制で臨みます

3. 設計上の配慮

- 1. 多様な立場の多くの方々の意見を組み込み誰にでも楽しめる施設を目指します
2. 施設利用者の出会いを創発する図書館を目指します
3. 安定したシンプルな構造の建物とします
4. 自然光が差込む明るい空間、卓越風を取り入れた感染症に強い施設とします
5. メンテナンス維持管理のしやすい長く愛される建物とします
6. 小千谷の木材や小千谷縮を利用した内装、家具とします
7. 雪を配慮した屋根とするだけでなく、雪を学びの場に活かします
8. 街に結びつけた施設を作り、非常時に市民が有効に連携を促せる施設とします
9. 子育て世代をサポートし、大人だけでなく中高生も主体的に関われる場を目指します

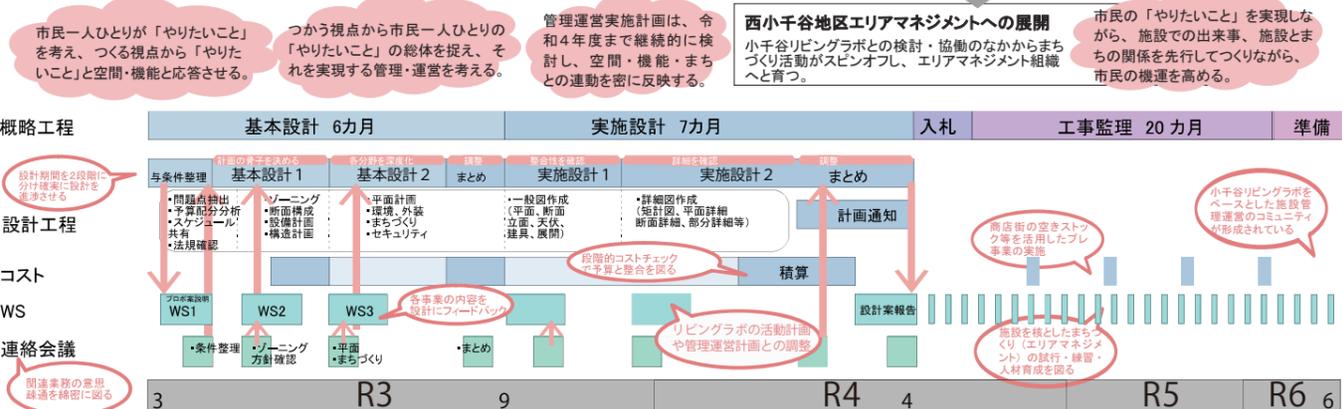
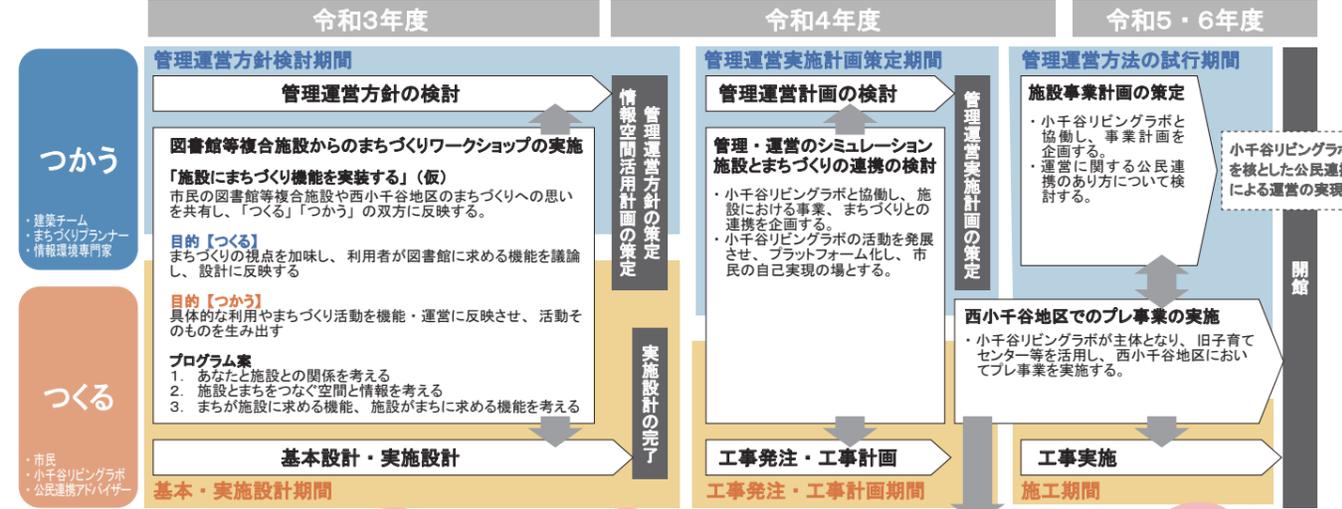
4. 業務上の配慮

スケジュールコントロール
設計初期に建築工事にかかる金額の構成の多くが決まります。工事区分ごとの目標金額を決め、設計の川上段階でコスト把握をタイムリーに行い、設計にフィードバックします

情報の共有
大きな模型やVRを使って情報を共有します。WSの後には、図や写真情報を入れた報告書を作成し、多くの方に共有できるようSNS等も利用して情報を発信します

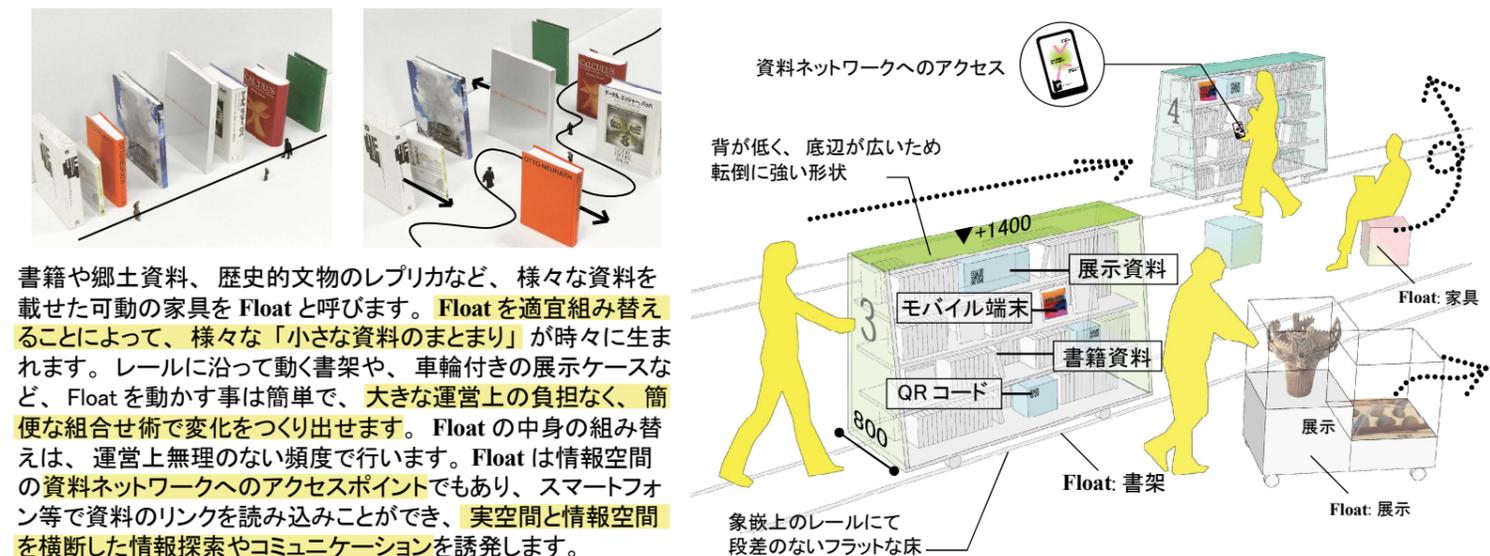
5. スケジュール / プロセス

図書館等複合施設における市民の「やりたいこと」を起点として、施設の出来事、まちづくりへの展開を考えるワークショップを行い、つくる・つかうの双方でそでの意見を反映させ、開館後の施設とまちへとつなげます。

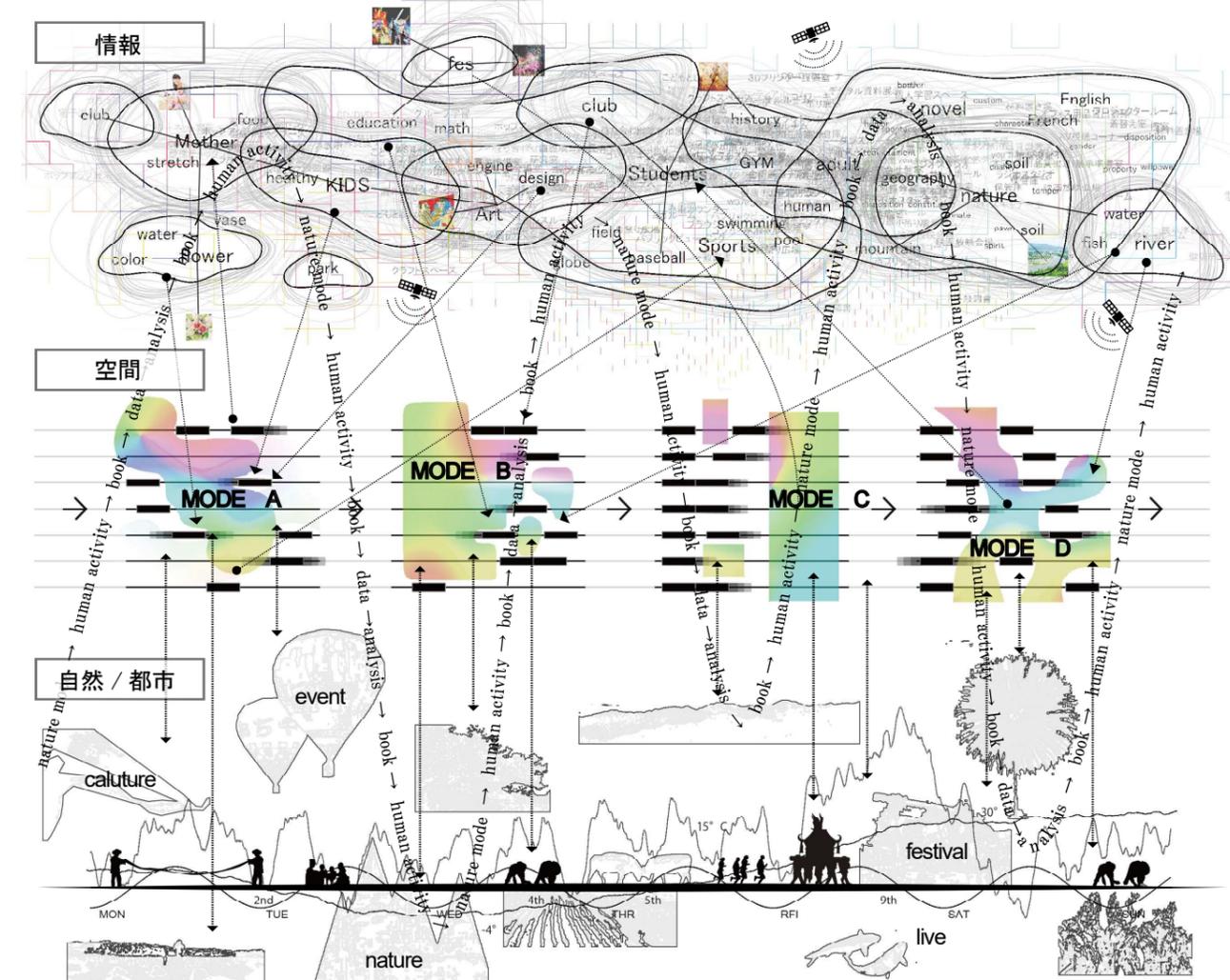
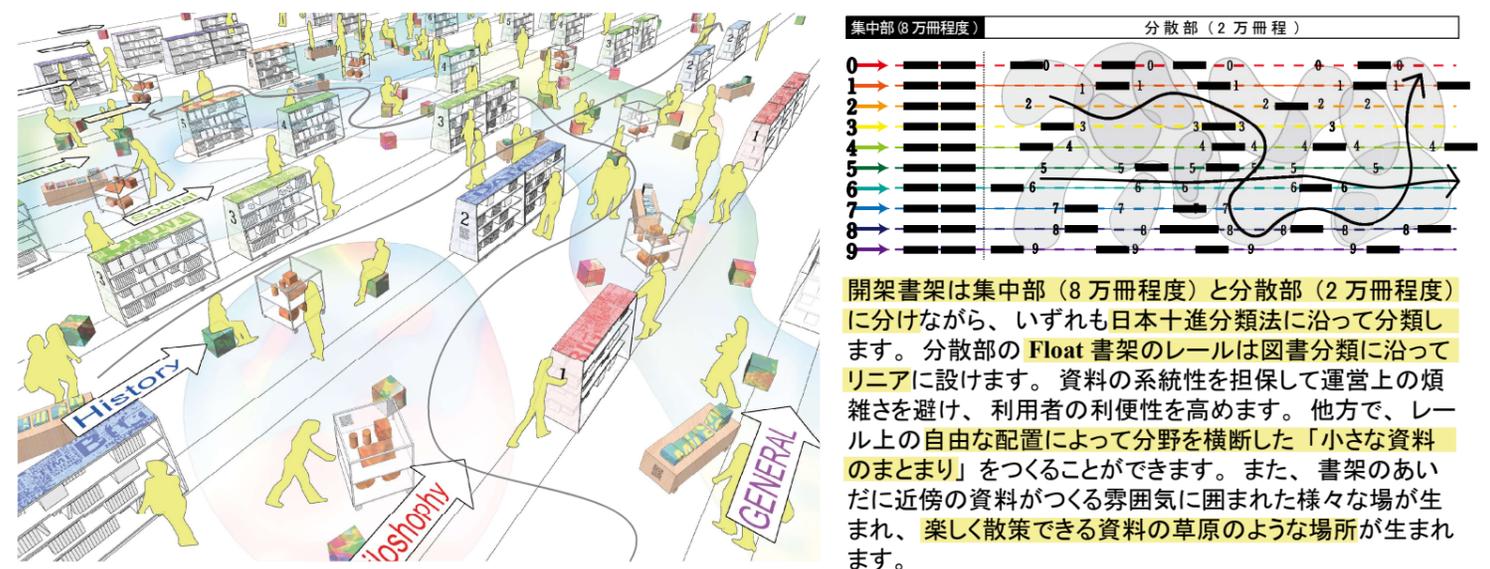


情報空間において、資料は多様なリンクによって紐付けられています。この全てを同時に実空間化する事は不可能ですが、ここでは、可変的な資料配置によって、「小さな資料のまとまり」を時系列の中で多様に変化させ、情報空間と実空間を積極的に関連づけることを提案します。利用者は身体的経験の中で、変化する具体的な資料配置に触発されながら、それぞれの関心を広げ、深めます。情報空間は、こうして生まれた特定の関心事を持った人々のコミュニケーションを緩やかに促します。このような資料、関心、コミュニティの循環が、小千谷のまちのバイオリズムと連動しながら、「暮らしのリ・デザイン」が生まれます。暮らしと結びついたバーチャルな人々の結びつきはまた、災害への迅速な自助共助の礎となります。

1-1. Float 一可動する家具によって資料配置が簡便に変化させることができ、多様な関心を誘発します



1-2. 十進分類法的秩序とランダムな散策性を併せ持つ書架配列



1-3. 資料・関心・コミュニティの循環

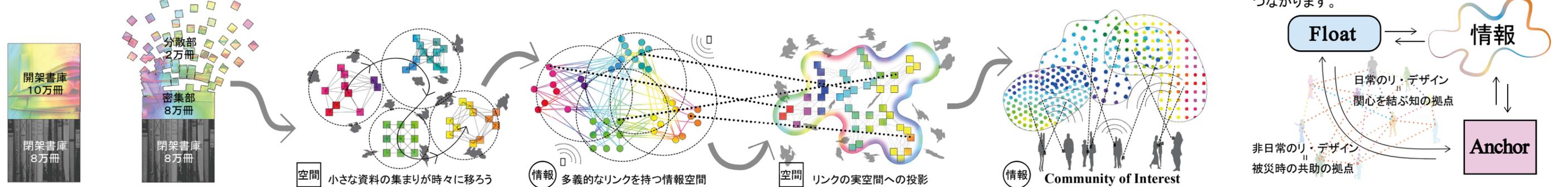
「小さな資料のまとまり」が関心を誘発する
 「小さな資料のまとまり」が人の集まりを形成する
 資料のリンクが人の関心を結び合わせる
 資料を介してバーチャルに関心が共有される
 関心を共有する多層的なコミュニティの形成

1-4. 情報空間が人と人の距離感を変える

顔の見える関係が築かれ、市民同士が近い距離感である小千谷だからこそ、情報空間における資料のリンクは、思いもしない関心事を共有できることへの新鮮な驚きと、新たな関係性をつくるきっかけをもたらします。また、コロナ禍のように近い人づきあいを制限される感染症流行期には、情報空間におけるサービスに重心をシフトさせ、多様なメディアで資料と関心を循環させることで、人と知、そして人と人を結び、社会的なつながりを生み出します。

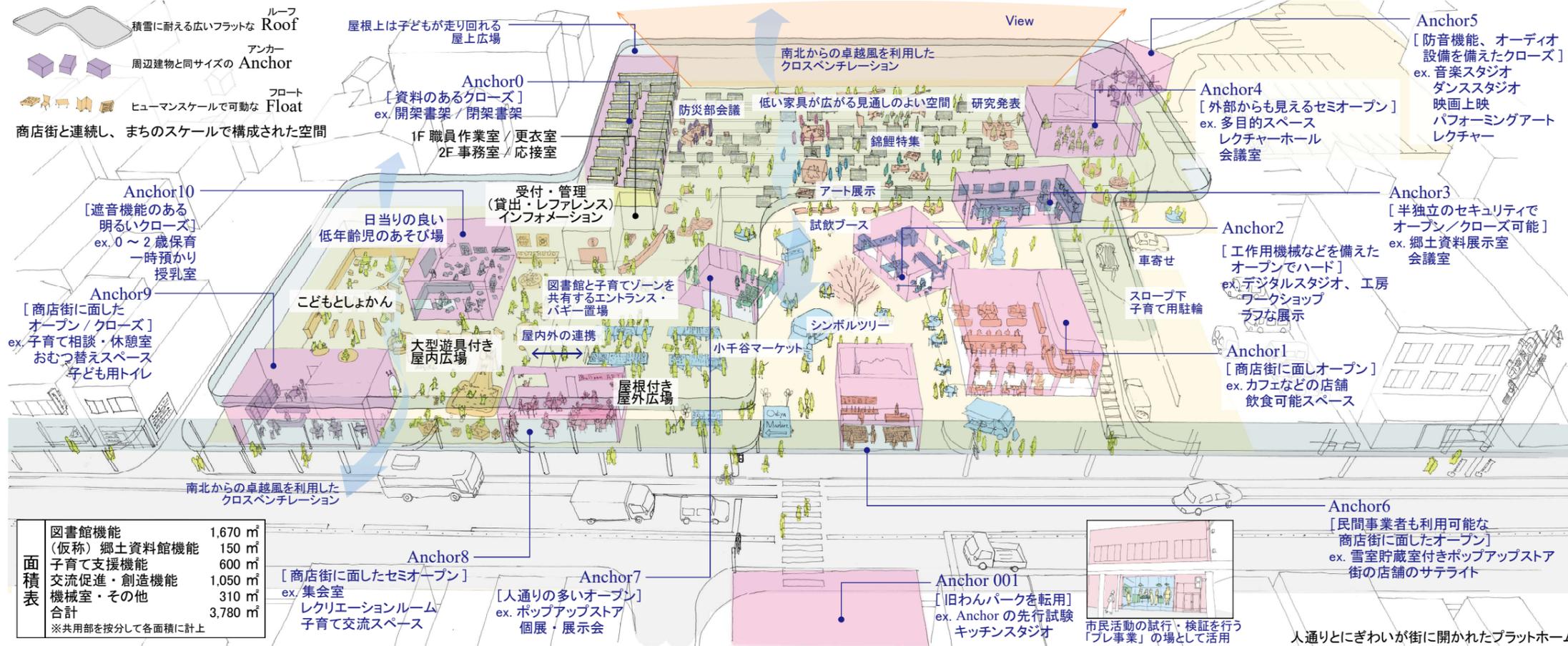
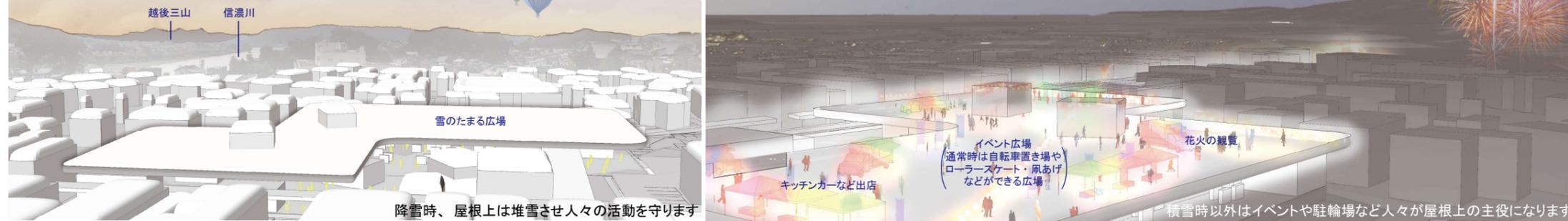
1-5. 関心から「日常のリ・デザイン」への展開

情報空間と実空間の多次元の資料ネットワークが新たな関心を喚起し続け、関心を介したコミュニティ Community of Interest を生み出します。その活動を Anchor が受け止め、それもまたアーカイブされ資料となります。そのような資料を通じた活動のエンパワメントの広がりは「日常のリ・デザイン」を支えます。情報空間を介したコミュニケーションのリテラシーは災害発生時における自発的な共助のネットワーク形成にも寄与し、いわば「非日常のリ・デザイン」にもつながります。



2. 小千谷の人々の生活と結びついた多様なシーンをつくりだす災害に強い建築を提案します

大らかでフラットな Roof の下に、Anchor や Float がつくり出す様々なスケールの賑わいが連続します。冬の深い積雪に耐える Roof をフラットにすることによって、群衆の荷重にも耐える、夏のお祭りなどのイベントに使える広場が生まれ、冬と夏で姿の違う活用ができます。フラットな屋根はまた、街道沿いに広がる雁木のラインとも呼応し、カフェやワークショップなど様々な Anchor が通り沿いに連続するまちの賑わいをつくりだします。越後三山に開かれた側には、背の低い可動書架の Float の群れによって生まれる草原のようなのびやかな風景に開かれた場所が広がります。風や視線が通る空間は不要に密な状況をさけられる安心な環境でもあります。



2-1. 生活 / 交通 / にぎわいのハブとなる場を目指します

商店街から連続した Anchor が広場を囲うことで、歩行空間を巻き込んだ賑わいが表出されます。また、多様な交通アクセスに対し安全性を確保します。降雪・積雪に関しては、国道側より低い南側に堆雪スペースを設け、除雪作業がしやすい配置計画とします。



2-2. 極大な共用空間があらゆるニーズに対応します

各機能の専用部を縮減し、兼用できる共用部を拡充します。図書館の閉館時には外部に面した Anchor の個別利用や、街全体のイベントの際には全館の一体利用が可能です。

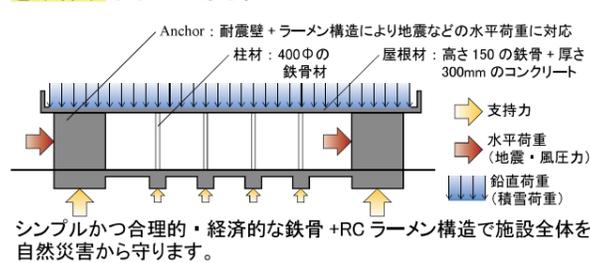


2-3. 被災時の共助の拠点ともなります

災害時には Float を動かして大きな広間とすることで、避難所として開放します。又、日常から形成されている関心のコミュニティやその拠点である Anchor が災害時に活かされる関係性やリーダーシップを育みます。

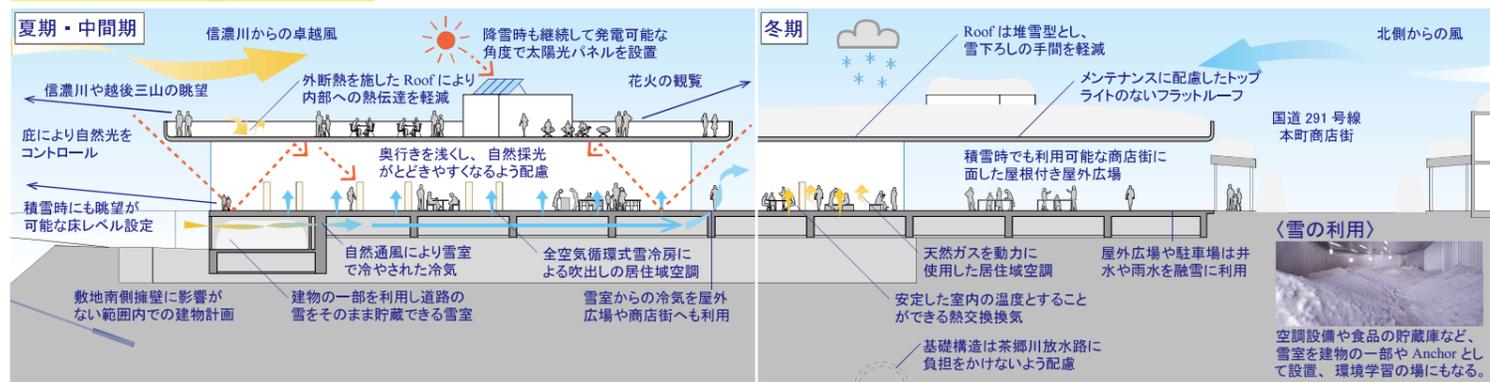
2-4. 自然災害から人々の活動を場を守ります

見通しの良い大空間を経済的に実現するために、7~8m スパンの柱グリッドによってフラットスラブ構造の屋根が支持されている。フラットスラブ構造は、型枠工事が容易で施工性が高く、地震力を負担する「Anchor」と呼ばれる構造コアに水平力を伝達するための剛強なダイアフラムとなっている。この構法は、シンプルで施工性・経済性が高く、また積雪や地震に対して十分な安全性を確保するものである。



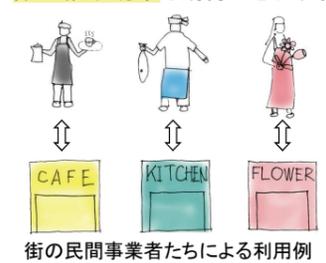
2-5. 環境に寄り添い四季の変化に順応する集いの場を提案します

南北をむすぶ小千谷の卓越風向に対し、一つながりの平面計画は、効果的な水平自然換気 (クロスベンチレーション) を実現し、省エネはもとより感染症対策にも効果を発揮します。また冬季の積雪は、地形を利用し計画された雪室に貯蔵し、夏季の冷房から雑用水と多段階に利用します。床吹出空調により、一年を通じ快適な室内環境を提供します。太陽光発電、雨水利用、雪利用と小千谷の持つ未利用 / 再生可能エネルギーを最大限に活用します。



2-6. 街の民間活力の導入

街の民間事業者たちが Anchor や広場を利用した実演や講習など、商店街と連携した集客・賑わいの相乗効果を図ります。実体験として施設で認知された事業者が Anchor として街に広がることで商店街だけでなくまち全体の相乗効果も期待できます。



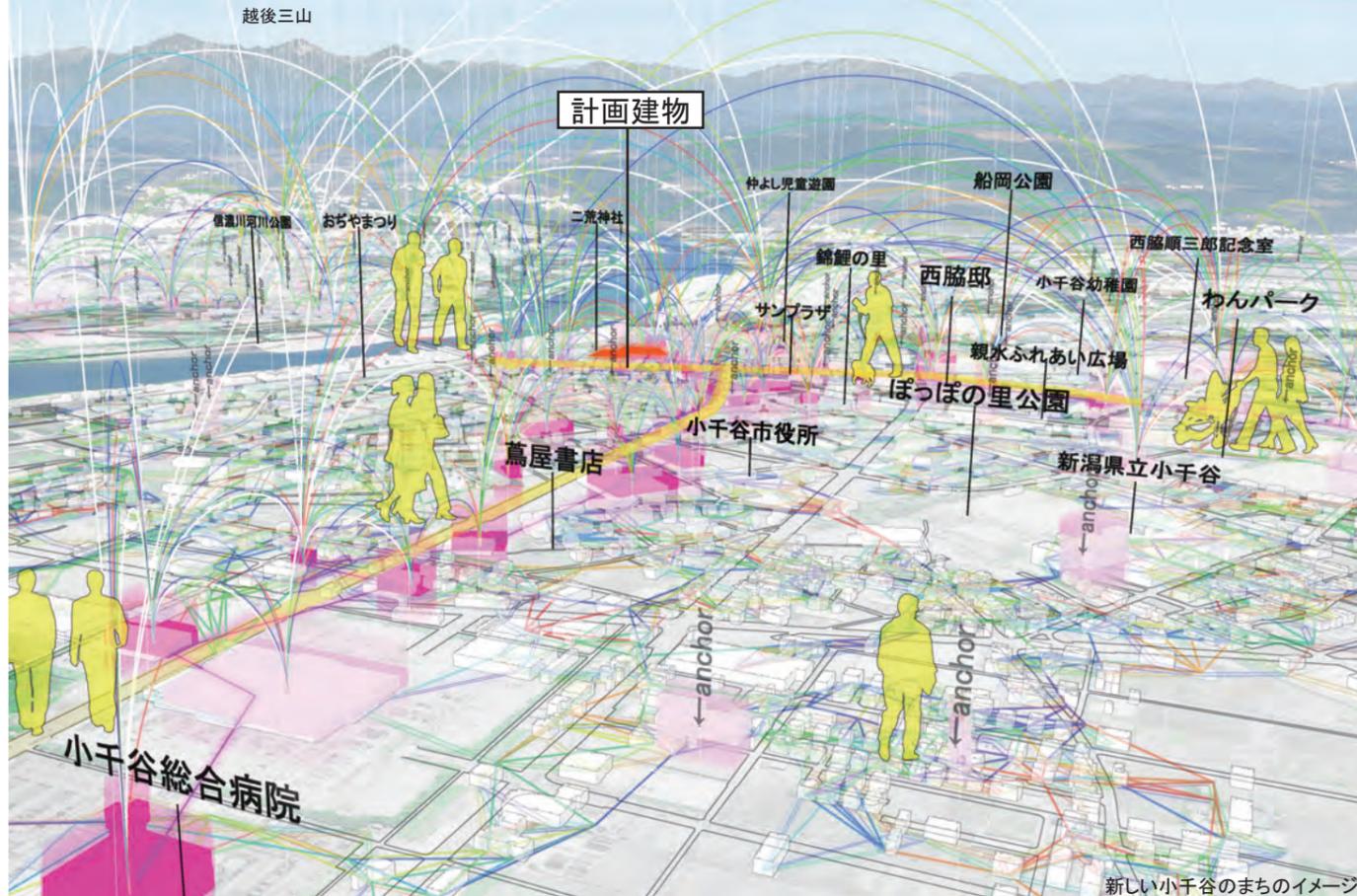
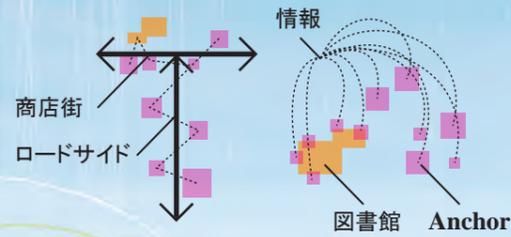
2-7. “今” を見える化

全館 Wifi と施設内の出来事の見える化により、どこで何が行われているかを発信しやすく、把握しやすい情報環境の整備を行います。アプリケーションや ICT との連動により、リアルタイムで施設外からもアクセスが可能です。



3. 市民協働によってアンカーをまちなかに展開することで小千谷市のまち・人・知のハブとなる施設を提案します。

西小千谷地区から施設へ、施設から西小千谷地区への人の流れをつくります。さらに、市民協働の下で、まち全体へと Anchor を展開するとともに小千谷市の様々な情報を集約・発信することで、施設がハブとなって西小千谷地区のみならず市内全域での人と情報の対流をつくります。そのためには市民による施設運営とまちづくり活動が不可欠であり、市民協働による設計プロセスを通じてその素地をつくります。このプロセスを通じて、市民が多様な世代や価値観と触れ合ったり、自分のスキルを使って社会に貢献するなどして、自己実現を果たすことを支援します

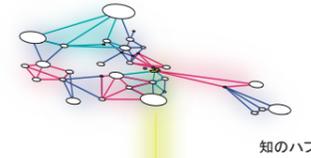


3-1. 図書館等複合施設とまちの関係性

まちに対して開くことで図書館等複合施設を西小千谷地区の拠点にするとともに、市内における市民の様々な活動や多様な資源をネットワークし、交通網とも連携することで人の流れを生み出します。そして、まち・人・知のハブとなります。

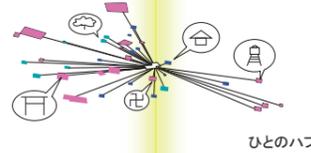
西小千谷地区における人の流れの起点となる：まちのハブ

施設では国道 291 号に面してアンカーを配置し、通りから館内での活動を目にすることができ、立ち寄りやすくすることで西小千谷地区から施設への人の流れを生み出します。西小千谷地区においては、市民と協働して、国道 291 号やサンプラザ通り等のストックを資料のアウトリーチや市民活動の場 (Anchor) として活用することで歩いて楽しむまちづくりを進め、西小千谷地区の人の流れの起点となります。



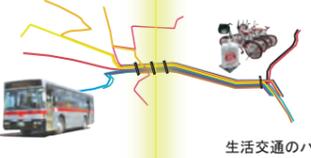
市民の様々な活動の場のネットワーク：人のハブ

商店街や駐車場、軒先、公園、自然環境など、市内の様々なストックを市民とともに探し出し、市民の様々な活動を受け止める Anchor として活用していきます。そして、図書館等複合施設では、それら市内各所の Anchor の所在やそこでの活動に関する情報を集約・発信し、活動とそのため場所のハブとなります。図書館等複合施設を拠点として活動する小千谷リビングラボは、まさにこのような人と人、人と場所・活動を結びつけるプラットフォームとして機能します



多様な資源のネットワーク：知のハブ

市内に点在する歴史文化資源や地域で継承される民俗風俗、そしておぢや震災ミュージアムと連携した災害の記憶・記録をアーカイブし、発信することで知のハブとしても機能します。資料を学校や公民館等にアウトリーチするとともに、小千谷市全体を郷土資料館と捉え、図書館等複合施設で資料情報を閲覧し、関心に応じて現地に赴いて鑑賞できるようにします。



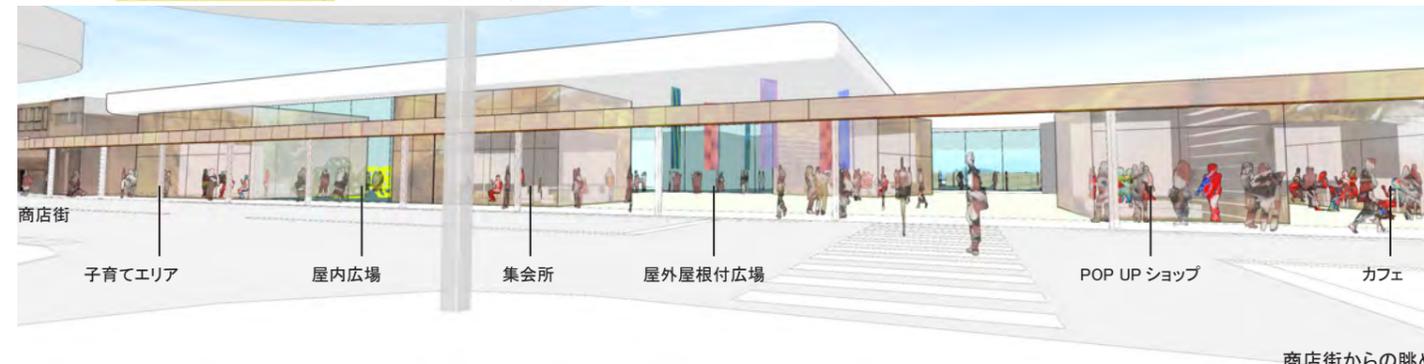
広域的な人の流れを生む交通ネットワーク：生活交通のハブ

多くのバス路線が通る国道 291 号線に面している立地を活かし、「西小千谷地区市街地まちづくり基本計画 (H28.3) に基づき公共交通の機能強化に貢献します。具体的には図書館等複合施設を、バスロケーションシステムを組み込んだバス待ち環境として機能させることで新病院→図書館等複合施設→小千谷駅を軸とした生活交通のハブとしての環境整備を行います。さらに、まちなかの Anchor や歴史文化資源に移動する際のナビゲーションも行うことで広域な人の流れを結節点となります。



災害時の避難を受け入れる場：防災のハブ

市内各地に形成された Anchor は、日常からの人々のつながりやリーダーシップを育み、身近に立ち寄りできる場である距離感から、災害時における様々な市民相互の助け合いの拠点となります。また施設は多目的な広場となりハブとして機能します。



3-2. 施設が市民活動のハブとなっていくため、「つかう」を組み込んだプロセスを展開化

図書館等複合施設が小千谷リビングラボというプラットフォームによる市民活動のハブとして機能するよう、施設の設計段階から小千谷リビングラボが図書館をどのように「つかう」のかを議論し、試行しながら施設設計や工事を進めていくプロセスを提案します。

市民による多世代型の「部活動」の場としての（仮称）小千谷リビングラボ

小千谷リビングラボでは、「多世代型の部活動」のように市民が自身の興味やスキルに応じてやりたいことを持ち寄り、メンバーの「入部」や「卒業」も柔軟に受け入れつつ協働して実現しあう場であると考えます。

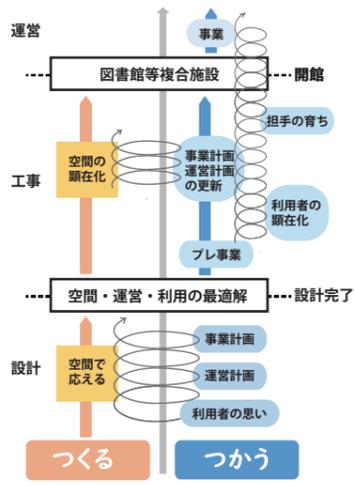
そのようなゆるやかなつながりのなかで、法人格を持って受け持つべき事業（図書館の管理運営事業や、不動産に係る事業など）が生じた場合には機動的に法人組織を組成するといった臨機応変な体制を想定し、以下の「つかう」を組み込んだ設計プロセスを提案します。



「つくる」と「つかう」が両輪となったプロセス

設計段階では、小千谷リビングラボは黎明期であり性格・役割・活動内容は流動的であるはずで、施設への要求が定まらない段階であるからこそ、小千谷リビングラボがどのように図書館等複合施設をつかうのかを議論し、設計に反映させていくプロセスが不可欠となります。そのようなプロセスのなかで施設の管理運営計画も定まっていきます。

このプロセスで重要になることが「実際に試してみる」という機会です。試す機会を通じて、施設設計や管理運営の検証を行い、そのプロセスを通じて人や組織が育つことができます。以下のプレ事業はこのような意味で図書館等複合施設にとっても重要なプロセスのひとつとなります。



旧わんパーク建物を活用したプレ事業の実施（見附市 駅前駐輪場2階の社会実験を参考に）

旧子育て支援センターわんパークは、小千谷リビングラボが図書館等複合施設の設計・工事段階においてその活動を試行・検証する「プレ事業」を行う場として活用することを提案します。プレ事業の内容は予め行政が定めるものではなく、小千谷リビングラボに参加する市民の「こんなことをやってみたい」という発意を市民の手で実現する機会とします。

このような施設の設計と並行してつかい手自身が使い方を議論するプロセス、その一環としてプレ事業を実施し検証するプロセスは、当提案者の1社（国際開発コンサルタンツ）が人口4万人の近隣都市である見附市の見附駅前において手掛けている「見附駅周辺つかう会議」及びプレ事業「みつけるプロジェクト」を参考としています。

